

本

学		史
卷册	号記	號番
六	一	一五
學校	縣中	滋賀

千二百



2101
512
Vul 4

田吉著

日本開化小史

四

田口卯吉著

日本開化小史

田口氏藏版

彦根
立
校
印
章

日本開化小史卷の四目錄

第七章

千三百年代小至りて日本の文學始りて世に出で

千六百年代まで文學此有様

千六百年代の末漢文一變せし事

同和文の始りて世に出でし事

和文又顯はれたる想像

千八百年代文學の進歩

第八章

千九百年代文學の大小進歩をいふ事

日本文章の基礎立ちし事

編史の体裁改良せし事

法律の成りし事

二千年代の末有益なる著書多く顯りし事

佛法の文學に効ありし事

二千百五十年以後文學次第小退歩せし事

其時々事情と想見して文學は消長を知る事

想像の沿革

日本開化小史卷の四

第七章

日本文學の起原より

日本開化小史卷の四

田口卯吉著

第七章

日本文學の起原より

文學と人の心此顯像を大凡そ人の心世小顯
る、その其種固ふ多し或は政治の上は顯はるしも
のあり或は風俗の上ふ顯りふしものあり文學と云
文章の上は顯はるしものあり其顯りふしもの智あり
情あり情の文章は顯りふしもの之を記事体と云
ふ歴史小説の類之小屬を智の文章に顯はるしもの
之と論文と云ふ學文論說之小屬を此二者共是れ
文學の本体なりて其文章に顯りふし、此至るて五

不相錯綜して明に判別をせざるはと雖ども其性質
 自ら相異なる所あり蓋し論文の研究を主として物の
 理を説き以て讀む人の智を服するものなり故
 不之淺記を不其人を必矣高尚の智をかすべからず
 記事に想像を主として物此有様を寫し以て讀む人
 の情を感ぜしむるものなり故不之淺記を不其の必
 ず高尚の情を有るべからざるを智と情との進歩
 以文學の史代最も明を示さばはべからざる所あり
 人の心を得て區別をせざるは其の何れも其情
 余熟ら其真状を考ふるに心を五官に集りしりて五
 官の外は心ありを思はざるなり然れども今論
 辨の便ふるを云ふ外物を判せんとは感觸を受く
 べからざるを云ふ外物を判せんとは感觸を受く

不今其智情の進むと進まざるを不因りて人の心は
 有様如何に異なるやを尋ぬるに初代不あるは人
 人衣食に急りて物事に研究を經ざる部分多きを
 為り不凡そ心不解し得ぬ事ハ大りた之を神業と
 見ることも多し是其智の有様なり又數多の事物に接
 することもれく數多の交際をも經ざるは以て其想
 像淡泊にして味なく迂遠にして曲折少なり是れ其
 情の有様なり文運進歩の後より及びて人々一事に
 其心を注ぎ其原因を發見するは不あらばを安んぜ
 ざるを為り不物毎に研究を經ざる部分多し蓋し初
 代の人とても今日の人とても職掌外の事の多くハ

世人の言ふがまはしく信すること常をれを各自職
 掌上の事不就て研究れ増進するに從ひ世人一班自
 ら迷謬の事を信せざる様よなきことなり是に於て
 乎自然の道理と説明する所の學問社會の有様と進
 歩せしむるは論文等出で来るなり是れ智の變遷な
 り人の源因を探るるの心あり野蠻の人の禍災を神
 符常を既探るの心あり此源因を探る者即ち禍災を免
 れ實利と求めんとこの心にて生を保ち死を避くる
 の天性は出又交際も漸く廣くなり各種の人情風俗
 とも見聞をほす為め小想像甚だ静らに且つ緻密な
 なりて詩歌小説等快樂より趣向出つ是れ其情の
 變遷なり要すふ小記事の巧みなるを想像の密なる

にあり論文の精なるは智れ洽き小あり其精江巧拙
 ち別ち社會貨財の進歩に從ふもの小一之を以て
 開化の進不進と徴證をふ不足のものなり議者或は
 言ふ詩賦の想像を古く盛んより後世不衰へ學問
 の研究を今日盛んより古代より欠くと特は知ら
 らず兩者共に時世の隆盛に從ふと進むもの小一て詩
 歌は特に先づ顯はるるもれたること我れ日本の
 文學史を見らものは其言の虚ならずを知らん

二千二百年代に至りて封建亂離の災日本諸州に洽ね
 くして世の有様彼が如く衰へ亂起たりしを文學の
 式微亦た極まり今更に往時を溯りて日本文學此本

源を尋ね其流小沿ひ其變遷を探りて二千二百年代まで
 下下ト一熟く我々國文章の最も古きものを探ぬ
 る二千三百年代より以前の事ハ藐として考ふべから
 ず蓋し我國古代小ありて文字なく人々唯く言語を以
 て其意を通したりのみ小て彼れ祝詞宣命及び和歌の
 類も文學あるれ前久しく行つ秋たさか如し其後
 三韓入朝し百濟内属する小至りて漢字漸く我國小傳
 はり其音を以て其儘し和語と寫ること、をなすり之
 と假名と云ふ吳音非つ入り其後漢音入りのなり
古事記皆吳音なり山崎吳成著文教温古
 然きども此時より以後専ら行きし所を漢文を學ぶ小
 ありて和語を以て文章と綴ること、を全く行はせ唯た

和歌祝詞若くハ宣命小のみ此假名を用ひたさか如し
 されど我國古代の文章よりて今日傳ふるものハ實に
 漢文を以て始りし即ち千三百年代上宮太子の十七
 憲法こそ最も古きものを之を次ぎて千四百年淡海
 帝の時より以後漢文愈々盛ん小ありて此年代より近
 江朝廷の令太寶令古事記太安麻呂撰日本書記舍人親王太
 等養老令の撰あり千五百年代小至りて續日本記菅野
 撰藤原大同類聚醫古語拾遺齋部廣新撰姓氏錄萬多令義
 藤原大類聚書古語拾遺成宿禰新撰姓氏錄親王令義
 藤原大類聚書古語拾遺成宿禰新撰姓氏錄親王令義
 解清原夏性靈集秘藏寶鑰海の撰懷風藻道江朝廷の末ま
 での詩集ふり撰者淡江文華秀麗集撰者詳なり經國
 三船良岑安世瀧野貞主等の撰小千四百千六百年代
 集良岑安世瀧野貞主等の撰小千四百千六百年代

百年代より千五百年代の末に至る

至りて日本後記藤原冬經文德實錄藤原基經續日本後記藤原良房等撰
 三代實錄藤原時平内裏式藤原冬嗣等撰類集國史菅原弘仁式藤原冬嗣等撰
 貞觀式延喜式本朝文粹藤原明衡の撰あり茲に至りて我
 國の文學始りて顯つこと云ふて可なり蓋し史と紀と
 事と論を依りて人心進歩れ成績よりて之茂其以前より比
 ず此を大なる懸隔たりと雖も時世の幼稚なる
 不當りて其成績の美と見れば甚だ難しとそされを夫
 の千三百年代より千六百年代に至るまで編纂する
 史類を閲せば其最も意を注ぎたる所を歲月時日
 此詳密神祇の祭祀赤雪白雉の發現等の類並に其外當
 時の人々心ばい祥瑞妖孽を認りたる事件を統記し

たりて絶えて事件の要不要を識別し取捨筆削
 の智を用ひざる所なき如し故に後世の史家が認め
 て以て編史の要點となりしは一事件と他の事件との
 關係を示す等れ事より絶えて心付うべりのみならず
 其彼の支那史亦多く記する所の一人の品行性質より
 其公衆に及ぼしたる影響をも記する事なく唯く面前
 より顯りたる事件を其儘に記載する小止まるのみ而
 して其如何なる事情よりして起りし乎に至りて著
 者全く注意を欠く蓋し社會事多し史を多しもの唯有要
 の事件を記する小止りざるべからず矣然る小當時此史
 更に之を削ることなく苟くも事ありと云へば人事小

關係なき事までも之を記載し唯だ巻帙の洪濼なる代
以て功績ありと心得いふが如きを實小惜むべきなり
要するは是等八年表にして歴史にあらざるなり史と
紀するは於て此の如し故に事と論するに於ても又其
弊を免れを蓋し人の事と論せんは先づ一箇の定説
なりとて之を論を俟たざるを然る小古
人の序文若くは論文代書する代見の小已れ先づ一已
決定見ありて而して后筆を執る小あらはるる為り小
大うたを四六の句、排偶の文代以て外部を議論と引
出を代勤りたるが如し抑も文學ハ人の心を顯すを
のなり人の心固より四六を以て量を得るもの小あら

そ天下の事物亦初を排偶より成らるるを滿胸の
議論吐露せんと欲するを必固衷心を導く處小從ひ決
して文章上の法則小掣肘せらるるに妨らざること理の
當然なり然る小議論をなすて之を記する故に法則の
手引小依りて言ふべき事と思ひ出さんとを其体決し
て真体小あらはるるを以て之小加ふ小至難の文字を連
綿て強ひる古語を博する小誇りんと欲するの弊あり夫
れ十分議論ありて之然記する小を古字を用ふるを
解小惡きものなり小初よりを言はんを欲する主意不
くして強ひて古字を用ふるに於て豈も高論を聞くを
得んや是蓋し人心の未だ進まばる小當りて至難の

外國語を以て之と文章不顯ハさしつたれば致を所ふ
り唯僅る小三好清行、菅原文時のニ封事の見ればさあ
るのさしつたの用は、其味をさしつたるに類する事
然さども文學進歩の勢ハ永く文体ハ澁滯を以て得て
抑制をへさ小あらず千六百年代の末より彼のうたぐ
るしハ漢文の体を漸く日本の語法と親和し稍く人々
此自由を記載し得れば体を得る小至れり彼の將門記、
純友追討記の如き其文体今日より之を見れば極めて
奇異不整を驚かすべく笑ふべしそのあまを雖ども之を
彼の法則を拘束せらざるを國史論文小此をれを自方
其意淺述ふに滑うなふ姿あま且つ此等の書ハ決し

て巧と稱するべし小あらずと雖ども稍く人の動作より
世の事情を述べんと欲せば小適を多あらず如し此變
成の文法終ふ一箇の体裁を爲し書翰の往復日常の日
記等小も此体を用ふ事とをなす之は日記体と云
ふは其が是より文章大小世人に親接し漢文を以て歴
史を書き格式を書きることとを全く衰へし小此体を以
て記載する事とを辨り其最も大なるその九歴記、權記、
岡屋關白記、小右記、春記、水左記、經信郷記、長春記、台記、山
槐記、未海日次記、吉記、明月記、王華殿記、三長記、の類小
て之をよむ小味なく其体俗醜を免さず其書中或を後
世史家の撮摘と要をへさる事件を記さざる小あらずと

雖ども之を要そふ古人筆削の智なく凡そ耳目に觸
 る、所々事の要不要を問ひを皆之を洩さざるを務
 めるは姿形を洩以て其文体の稍く自由と得るは及ん
 と却て無用の事のみ多く記載し讀むも此を以て當時
 の事情を知り小苦まゝに至り
 斯く漢文一變の時小當りて日本の語法を以て文章を
 作る事漸く世に顯るゝ一に至るは真小日本文學の
 幸なり蓋し和文は最古まもの成云はゞ古事記小如
 く如ふはべし然れども其語や固と古語より既に當
 時の語にあらざる當時此語を以て記載するに至りしと
 平假名片假名の發明ありて之を以て和歌を記すこと

大小行々秋歳月の久しきを經て世の習俗も親和し終
 小日常の言語を筆に寫すに至るは時を在りと見え
 り千六百年代の中頃より和文を以て紀行或は小説の
 類と記すを漸く起さる今其一二を示さん小千六百
 年代より伊勢物語作者業平朝臣竹取物語作者源頼
 説あれど土佐日記紀貫之の住吉物語作者詳ら須磨記
 管家の作なりと云ふ傳宇津保物語作者確ら大和物語
 作者滋春と華山院との類出でより千七百年代
 云へり共小確らなりとの類出でより千七百年代
 至りて落久保作者源頼と云ふは濱松中納言物語源氏
 物語藤式部狭衣位の大式三泉式部物語作者
 藤原の作なりと云ふは松島日記清少納言の作紫式部
 なる枕の草子清少納言の作紫式部

日記部式蜻蛉日記部大將道の類出でたり是時小至り

て其用語漸く廣く其文字漸く艶小春宵秋夜の眺と記す少年佳人の情致寫すこと眞小細小且つ巧みを添へたり嗚呼文字を以て事を記し且つ論を至難の業なり然まども自國の言語を用ひ自國の語法を用ひて之を書きおふいふでる其心の働を顯し其に至らざらんや千七百年代の和文を眞小我の日本人心の曙光小して恰も朦朧の雲霧を闢き清明の影を現るが如く寔小目覺お見えりなり

蓋し文學の史の文章の和漢と撰を唯だ其主意趣向の巧小して味あるをこそ取りてさるる彼の漢文は論

理を全體と讀を來りて和文の有様を顧みても其事の顛末あり其語の味あり固きり數等の上よりあると云ふことを得を然れども不幸ながら和文の起源を多く婦女子の手にのみ成り男子よりして之を記す後賤小婦人の有様ありは文章小最も必要あり精神を又さ且つ其語句冗長小しく各異の事情より之より徒小一様なる有様と記すのより其彼の物語は諸書の如き當時の幼稚なる時代小ありてへ極まり巧みにして且つ其進歩も極まり速うなりこと疑を容れずと雖も其活發の氣が亦なく又人の注意を促すべく有様の變化も形を當時人心の幼稚の如くと然示るは明證なる

日本傳心史 卷四
一益し小説の味々各種の状態と集むるにあり文章の巧みを抑揚頓挫の其節を得る小あり然るは此物語の如きも多くの唯優遊閑暇なる雲上人の癡々たる有様を長くし編りをもすて其他を記すことあるなす嗚呼文學への心成顯のをもその眼を藤原氏以来の柔弱なる習俗と以て活潑敏捷の文章を得んこと固く非し望むべしと雖も其文の氣力ふる亦驚く小堪へたり夫の源氏の如き狭衣の如き優美の情極りて多しと雖も次いで此弊を免れざるなり蓋し人智の進むに従ひ用語の愈々廣く文章の愈々精なること自然の通理亦及代以て用語の廣く文章の

愈々精なるを見直り承認せしめて以て人心の進歩せしこと然證をば小妨けならずとす千八百年代の以前はあまては漢語の用法尙ほ未だ日本の習俗に親和せざるを以て漢語和文各々分離の有様なりしと歳月を経るに従ひ漢語漸く世俗に浸染し千八百年代の末千九百年代の初より彼の所謂和文中に漢語と交ふこと愈々多くなりたり此時に當りて漢文の變体なり日記体へ愈々日本の俗語と和し日本の俗文も亦漢文の句調に近似し其間自ら一種中間の文法と生ずる此萌芽を發せり余は之を日本文と云ふ即ち當今まで用以傳ふ文章を云ふなり千八百年代の末榮花物語と云へり

書四世小出でたり其著者藤原為業なりとも云ひ又
た赤深衛門なりとも云ふ確なるなり矣千九百年代の始
め小至り續世繼十世小出初たり其著者亦詳かならざる
其他藤原通憲本朝世記卷三十と著しせりと云へども
惜ひへし今小傳からず是數書々實小我が國に於て日
本文と以て歴史を記載する所の濫觴なり蓋し物初め
より完全なりと得る前の二書は如き未だ彼の冗長な
り物語の文法を免るれども其編史の体と恰も彼の
物語小於なるなり如く月の宴夕霧雲井子の日もつ春等
の題目は掲げて篇くと區分したる者なり且つ其記さ
せり所も重なる帝王の遊宴大臣の榮華后妃の入内等

の有様と記さる其間小和歌を交へ以て女この狀態
と寫せしものなりされど其意は注さる所決して國家
有要の事件と稱すべきならざると雖ども之は代何事も差
別なく混合して記載したる六國史等の錯雜なるに比
るれが稍く選擇の智を存すと云ふべし且つ當時の情
勢を以て王室優柔の趣なり代以て所謂政事上の重なる
る事件とあて人目小觸る所も遊宴漁色小過ぎざるや
も知るべからざる今之を記して後世の史家を以て古情
の一斑を窺ふを得せしめ且つ將來進歩の第一階梯を
構成せしむる其功極りて多し

王朝の時小當りて唐人の説大小我國一行り社學校と

建く學士を優對する類の事ハ仁政なり美舉ふりと
 稱贊する此所謂聖人の道也政府代以て教育と保護
 する所ありふ如く見做せしものと思ふ近江朝廷は
 時千四百年代百始りて學校を建らば奈良朝も至りては諸國
 にも學校と建らば且つ大學寮と設んで之と式部も管
 せられしなり當時漢文を讀むは片假名の發明ふき
 たり為りし和讀を云ふと云ふは或は或は
 一等の點と漢字の四隅上下或は或は
 方々片假名を讀むは漢字讀むは或は
 後歷朝金銀田園等と學士も給て文學と獎勵給へ
 り之を學文料と云ふ又燈油料火の望等の名あり桓武
 天皇都と平安も遷給ひ後ち又學校と之を建く教

師と唐より迎へ又た學士を彼國も送り給へり是より
 大江菅原の二家起りて専ら學事と管せり其外貴紳の
 學校又多し弘法大師の綜藝種智院檀林皇后の學館院
 藤氏の勸學校源氏の奨學院等一時盛んなり其勉學
 する所の經籍も毛詩尚書禮記周易左傳五經と周禮儀
 禮公羊傳穀梁傳以上之を如へ論語孝經老子莊子以上
 加へて十三經と云ふ是より王朝の文學と獎勵給ひ事至
 れりと云ふべしさればこそ其時世の疎野なりにも
 得似る六國史其他律令格式の如き浩瀚の書類と編む
 事をも做し得るべし然るども人智の度も至りては
 必るしも政府代獎勵も由りて増進をへきものもあら

ざれを令し至りて見よ。一きそのを唯だ淺薄なる大冊
 の高閣に堆きと見よ。のみ抑も學士よふものは何を為
 う。小他の職工よりも重んぜよ。さう文學なる者ハ何が
 為う。小他の貨物よりも尊ぶよ。さう其功績の人類に及
 ぶ所如何。小相異なる乎。余を以て之。或見よ。小更に貴重
 をへきあると見ざるなり。然るに況んや徒に古字に通
 し古書に明らかなるのみ。此學士をや抑も人心の進歩
 ハ貨物の進歩と併行をよ。小ものふきを今其貨物の進
 歩と妨ぐて。特小文學の之を感んならしめんと欲す。小
 と恰も車の兩輪の一を退れて他は進めんと欲す。小
 異からざる其目的を遂ぐる。こと能はざるなり。此をを見

こと非王政の柔弱。小歸り學士を保護する能はざる。小
 至りて我國の文學漸く獨立の萌を得。其將も小傾覆せ
 んと。何もの時。小至りて始りて見よ。一さの書あること
 と之を自然に任するも。何ぞ文學の衰零を憂へんや。況
 んや自然に任して衰ふりも。此を即ち人世に無用なふ
 此明證なり。をや。或爾時皇の御座に。何事の御座に。

日本開化小史 卷四 第七頁
 此明證なり。をや。或爾時皇の御座に。何事の御座に。

第 八 章

鎌倉政府創立以後戰國小
至るの間日本文學の沿革

千九百年代小至りて我國政事上より起りたる事件即ち
鎌倉政府創立の一事ハ文學の上より於ても非常の進歩
と促せしむるを蓋し天下非常の改革を非常の感觸
を人心小來さしむるを得ず熟く此革命の成跡を考ふる
小其及ぶ所特ニ政府設置の場所を關東小轉移したる
の之に止らず夫上ニ帝室專有と思ひ來かざる政權も
自ら帝室を離れ去る武臣の手小歸し下を萬民管
理の職小任し地方小事務を理りたりし國司も其權と
殺されし地頭の威權諸國小興立ししを以て此世運
の移轉小際小立てしものは其方向小迷ひて驚駭せさ

こと得ざるは之と殊小其以前より例し少なき事ども多
く政事此上より出來て一天萬乘の尊きも數々幽囚の辱
と免られ給はざりし類の珍事續々とて踵と接せし
うを太平小慣は榮華に耽るる都人等如何でか恐怖
せざるんや此時より當りて夷と賤に慣はるる東國の
男兒々都小攻り入り都の人を關西小追り其人民
の移住諸國の間小起りて人々新らしむる風俗を見新
き言語殘聞く小至まり抑も人智を物小接る小長し
人情を事小觸りし小精をささむるを彼の数百年來
依然として運動なき有様ありし人々此新らしむる世
間の現像を目撃する小及んで自ら數多の元素小胸中

不貫徹をいふくんばあるが此元素や則ち鎌倉政府の
勤謙なる政務の下に愛育せらるる爛熳なる花を開き
郁たる香を發すに至りし事誠小時日と費さるるなり
千九百年代の中頃に至りて大鏡水鏡の二書世に出
たり此二史の如きを大小歴史の体裁を簡明し後
世の人を志して古代の沿革を知り易らるるむれ好書
なり蓋し此書未だ決して國家の有要なる事實と記
せるものと稱すべし又決して事實と事實の關係と
記せるもの小ありしして徒に帝王大臣の歌謡詩
と吟せらるる心事とも殘記を以て一篇の本主と為
るる如きを免る事と雖とも之を彼の千八百年代の

末千九百年代の始りし顯きしは榮華物語及び續世繼
等小比する小編史の体裁大に備ふ所あり即ち物語
の体を免る事と歴史の体と近似しを見らるる蓋し
榮華物語の世に出たり頃まで我國に於きて正史を記
す事ハ必らず漢文を用ひしを依ることにて漢語交り
れ和文を以てし事絶えてなり和文を重し草子物語
の類を記す小のみ用ひたる習俗ありしを榮華續
世繼の記者が此文章を以て歴史代記とす小當りても
自ら厳格の体裁を用ひしで小勇進し難きの事情や
ありん優雅なる題名を掲げて篇章を區分せり然れ
ども此二鏡の顯きし頃に至りては世の勢既不正事實

のら此まで此文法を用ふ、有様と云は斯く
治世の順序を逐く歴史と記つるを、浅敷んをいふ至り、
ものを見えたり是を以て時世の進歩と知ふべし
之小續きて葉室大納言時長の著せ、保元物語、平治物
語、源平盛衰記保元平治二物語を語句軟小して漢語も
の口氣と帶ふ故小二書同一の手に成るこゝ疑ひなき
小ありを然れども今群書一覽に據りて其作者を葉室
時長小及び信濃前司行長に著せ、平家物語の敷書世
小出たり此二氏の記を所を見、小行文の巧みふ、
と体裁の具りきふとに於て遙う小千八百年代の諸書
小超越をいふのみならず、實は後世に史家として長く之
に據り編史の術を試まむと、此基を為せり蓋し文學

の進歩を文体の自由と得て十分小思想を吐露せしむ
る小因ふなき下、而して文体の自由を得、を言語の
増加を以て第一の助とを漢語の和文小入りしり、文
章の用語大増加し、行文に自由と得、小至くと雖と
も千八百年代にありて未だ十分ふる親和と遊々を
して自ら分離の体なき小ありず然る小二氏出つ、小
及んで漢語と以て活潑勇壯なる状態と記し、和語を以
て幽鬱悲哀なる有様と顯し、相交へて以て色々其趣
きを寫し之と統ぶるに文章小最も有要なる想像力と
以てせしむ無限の情趣毎句に間小存して誦讀に際
自ら甘味の湧出をふの思ありしむ是、小於ては我國

の文章漢語和文に間ふ胚胎にして始りて當今日本文學の基礎と固ふせりと云ふべし。然れども二氏の日本文學小大功あるを決して其想像力に緻密なをよしと文章の体裁を修正しよりしと小因る小巧らざるふり彼の世小所謂記事体即ち事實より因りて統記をこれ文体を以て歴史と記載とし事是なり抑も歴史と々事實を記すものれり故も事實は種類と固めて沿革を示さばべきなり然るに我王政の時より編年の体即ち年度と以て事實を類別を此の文体行はれと一文の中不混記せり而して其年月淺詳を小を

る史家の最も精神を籠りし所なりき此書を當時の政事の有様如何なりし人民の情況如何なりしを聞かんと欲をばも全く之と記さざるのみならず其記を所の事をら其緒淺見出ること甚た難し唯も管公の類集國史のみ稍く其緒と見出され便を與へて人とて其卓見小服をいむものありと雖も其記する所の事實々矢張國家必用の事小あらざりき然るも二氏出さし及んで年月の古今小關せを事柄に從ひて類別し之を記載せしむる數代の事件自ら一讀の下小瞭然たるを得たり嗚呼天下の事多し其沿革一に相異なり之を述べんと欲をを決して編年の欄中小嵌入をべし

ら矣二氏乃ち其約束と解き人心伐して自由小發露せしむ其功多しと云ふべし且や此數書の著りたしり歴史漸く和歌の端作りの如き体と免社政事上の事件と記そに至り又人の品行言語の政事上小及ぼせし事どもを記さり此体裁れ一たび世小出てしり以後數百年間の史家皆之小據りて以て當時の時情と記載し後の世れ人とあて興廢存亡の理由と窺ふを得せしりたり其功多しと云ふべしされど見らば我國の歴史小於て政事上並小人民の有様と詳う小さるるを得たしハ實ニ保元平治以後の事らふことを
鎌倉政府の治世ハ斯く編史の体裁と行文の方法と小

於て大なる進歩を示せしのみならず實小法律の點一於ても亦後世の模範とならばべきもの茂出たせり蓋し王政の時小當りて制定をらまし法律を全く唐の制度と移ししはもの小て果して能く當時の習俗小適合せしや否ハ今之を知りに由らば然もども武人地方小群起し封建の元素を形成する小及んで其法律亦た地方と制を小思らざる事ら前し述べし所小て詳うなすべし鎌倉政府の時に至りて即ち其習俗は因り所小従ひ法律と編制し以て國体を固くを貞永式目則ち是なり此法こそ我が國小おきて始りて自國の習慣と基きて制定さるるもの小して能く時世は適し後の政府

すても長く之小據らりたりたつハ編者の榮譽多しと云ふべし

鎌倉政府創立の始り小當りて文學の進歩此の如く著しかりしを其治世の間世小顯ハまた書籍皆見べきもれ多し今其一二を擧ぐん小承久記著者未詳今昔物語古今著聞集辨内侍日記讚岐典侍日記源親行の東關紀行の類ハ或々政事上の得失を議し或々數多の奇事と纂集し或々佛理を演述せしもの少して凡て見べし此意見と存しり而く其文章は乃ち和文ハ漢語と交へたりもれりて其体裁亦た趣きを同ふせり然まとも是時漢學より一變を日記体の文尚行ハ

まざらふあらむ彼の愚管抄愚昧記玉海玉藻明月記山槐記平戸記東鑑百鍊鈔仁部管記吉續紀の類々朝廷若くハ鎌倉政府の官吏れ手に成りたりもの小ちて依然として往時の紛雜なれば体裁を存し更し改良するものあり然見ゆり又日蓮上人の註畫讚親鸞聖人傳繪及び元享釋書年中行事の如きも皆此体と以て記せりされを當時と雖とも公けられ尺牘日記等を尚此体を用ひきふこと然知るべし唯だ其愈々和語小親和したる有様を見よのこ

蓋し人智の未だ進まざり小當りてや自然の道理と講究し人類の幸福を増進せしむる類の事を未だ十分小

行つたを以て却て人心殘恐怖と爲る事件も人心と
集むること多し此れを太平の時も當りて世に顯くた
る事件も常も曖昧の内も埋まれば却て鬭争戦亂の際
も當りて人と殺し城と攻むる勇將猛卒の武者振のみ
が史上も詳ふり々諸國の歴史其揆と同ふせり鎌倉政
府の治平致致をも百五十年其間執權並に評定衆の智
略あり功勳あり事々古史にも數を述ぶ所ありて
且つ是利將軍の時も至り大に武人の羨慕する處あり
事々當時の史も見ゆ然も此平和あり行ひを當
時の史家れ目を注ぎし所もあらざるべし如何なる
政道なりし如何なる文勳なりしかを今日も詳くも

する能はざるを惜むべきなり此一事以て鎌倉時
代も於て文學尚ほ未だ民間に洽する人心の度未だ
進まばしを知りて是るべし
うは有様を以て日本の文學殆んど百五十年は太平
の雨露に浴きし後再び政事上の動搖出來り鎌倉治世
の文學の最後は光耀を發せしなり是れ即ち二千年
代の末元弘建武の争亂あり蓋し前文にも略略説示せ
し如く戦亂を到底文學を進接せしむるものあり
と雖ども多く人心を蒐むるの事件あり代以て其時代
に適志し進歩代著書多く此際も現るなりことなり
されば元弘建武の亂起り不及んで鎌倉時代も養成し

たふ文學の種子ハ更ニ熟練の香を添へて世ニ咲出て
 きり今其最も著明ニして且有益ふニそのを列記せん
 小増鏡二條冬良の著なり前の大鏡保曆間記詳神皇正
 統記源親太平記作者極り園太曆臣公賢船上記詳未伯耆
 卷詳未關城書裏書詳未皆々見べきの書ふり其述ふニ處
 々多くハ戰亂の有様若くハ帝統將門の確執等と記の
 を不止まると雖ども其間或々政事ハ得失帝統の正潤
 並ニ公家武家の盛衰ハ基く所と論をもるもの多し其記
 者の智力相同しらを其議論素より功拙ハ分たあら
 ると雖ども其文体ハ則ち盛衰記平家物語等と同一の
 その少く稍く漢語と交ふの多きを見られし就中太

平記の如きを之を用ふニ事極りて多く稍く博きハ不誇
 るの姿ふきハ不あらむ之を要をハ不文章の點ハ於て々
 未だ盛衰記平家物語等と輕重ハ難しと雖ども其眼目
 の注ぐ所ハ至りてハ當時の書却り往時より勝る所あ
 り就中正統記の如きハ日本古來ハ沿革を統括ハ國家
 有要の事實を網羅ハて殆んと遺を處ふハ其王家ハ衰
 頽武族ハ興立等ハ注目ハ其源由と推究ハふが如き真
 小得かハ左きの書と云ふハ蓋し我國ハ於て社會の有
 様成記ハ其變遷の基く所を論をハ書籍實ハあること
 なく盛衰記平家物語の如きハ其文体極りて巧みハなり
 と雖ども著眼の鋭ハなり不至りてハ遙くハ之を二千年

代の末二千百年代の始り小顯きしは諸書に譲らざるを得を而して正統記を實小鏡の銳ふべきのあり之と後世の歴史小比それ其議論尚ほ識すべし處多く其體未だ備はらばし所ありと雖ども二千年代よりて此書ありき以て當時の文運と後世小誇稱をり小足らばり

此時不當りて隨筆の書亦た見らばるもの多し明惠上人のほろし草子兼好法師の徒然草如きを議論も高尚しし如何し手際を小書体あり而して其論稍く心理の事に及ぶ所あり實し日本の文學成飾る此一具と稱すべし又程朱の學も此時始りて我國小傳り

惠法印之成學いと云ひ傳ふされを我中世文學の最も盛んなりし此時小ありと云ふも証言ありす

蓋し學問上の研究を人心の中小發る事ハ後世開化の結果小して經驗少き世より絶えて現はるる所なりと雖ども彼の想像力小至りてハ早くより人の心小結ぶも其なまはまを鎌倉時代の諸書中より智慧茂進むる資料小至りてハ殆んど之成欠くと雖ども情を動るその趣向に至りては既小大し文章上に現はるるり其所謂進歩するものも實に其想像の増進小外ならざるなり當時の史を記し事を論を多し見らば多くハ皆無常と觀し物の憐れと説くこと多し抑も此想像ハ全

く佛法より由来するものにて王政の時より未だ十分
 小文章上小顯り秋ざりき源氏、狹衣、榮華の如き艶々則
 ち艶々ると雖ども未だ悚然と志て恐るゝの想像少く
 此想像源平盛衰記より起り平家小至りて最も盛んに
 太平記、徒然草に至りて極りて密ふり其他神皇正統記
 の博識より卓見ふり保曆間記の簡單より静肅ふ
 ことも佛法の想像小至りてを自ら全篇小貫通するも此
 あふり如く抑も此の如き所以のものを王政は時より
 佛道久しく人心小浸染し鎌倉政府の時に至りて禪學
 愈々盛んを呈しう為り小文學の上小大に顯りふり小
 至りしふり而して我國の文學此想像れ為り小裨益と

得たりこと少くふあらはるるを

鎌倉政府既にして封建武族の海内小割據を以てり世
 の中次第小衰へ亂さるるを文學も亦隨と退歩の
 姿となまり然れども二千百年代の中頃即ち足利氏治
 世の始め小當りては鎌倉以後の文物尚存するものあり
 して文學は見るべきもの少なからず南朝の末路に當
 りて世小出てをば櫻雲記、續神皇正統記、南朝記傳、梅松
 論、吉野拾遺の如きは前の諸書不及むとぞ所多しと雖
 ども其文法整ふ所あり以て當時の事情を詳うふるは
 に必要な書なりとさきば此時に於て未だ遠く文學
 衰零せりと稱する能はざるそのあり其後封建潰裂の

勢ひ日月の増進し世の有様益々危殆ふ迫りしうは
當時に顯ハ社を著書も従ひて情味を失ひ其文章愈々
枯燥を多し至れりさきを應永記ハ明德記より劣り嘉
吉記を應永記より劣れり其後椿葉記鎌倉大草子此書ハ稍
く見らるべ應仁記の類ありと雖ども皆文意の明らなら
ざりし多し要するに二千百五十年の頃より殆んど
百年間文學次第に退歩の姿を示せり真に歎をべきこ
となを蓋し斯く文學の衰微に至りしも彼の王政の時ハ
如く外國の古語小汲くとして人間天性の智力と働ら
志むる能はざりし如き弊風の行つれしにあらざる其
文体の自由と極めたることを恰も鎌倉時代と異ふ

かなまじとも唯人々安然としく思想を此點に注ぎ難き
世の有様とありしにゆるきを嗚呼海内麻の如く亂世
群雄割據をばの世に至りて人民豈に文學行事とすか
の暇あらんや則ち天然に打ち勝つれ志ハ去りて敵を
ハ行それ略とを筆硯に親しむの樂を散りて奮戦塵
殺の怒りとなふ茲に至りて終に文學の光を東洋孤島
の内小滅せり嘆そるに勝ふべけんや

思ふに文學の消長を知ると其記をその時代の様子
と想見すは必ず便利なるべし其彼の源平は戦南北朝
の争は有様と思ひ見しに關東武夫の勇ましく王都の
小婦の美しき其他攻城野戦の篠木を削り駈引きて顔

前不見_レ之_レ如くに思_レふ、不_レあ_レるを_レや去りて應永二十
零五年 嘉吉^{二年}の世に亂れ海内湧くか如き不_レ至_レりて
如何なる將士に智略あ_レる_レう如何なる武夫が猛勇な
る_レか思ふに武勇の氣當時不_レ減せを闘争射撃の術古
より拙_レるから_レ殊に此時とても秀才佳人の全くなき
にもあ_レる_レ唯た其_レ文學の衰へきふ_レ為り不_レ其人柄
の慕ふべきふ_レ事跡の好みそ_レべきを見_レざる_レなり
是_レ共以_レて文學の盛衰を證を_レふ_レ不足_レる_レなり
以上は於_レて略_レる_レ文体の變遷と智情の盛衰とを通覽し
た_レま_レる_レ史_レ小_レ古代に回顧して文章上_レ不_レ現_レる_レれ_レる_レ氣風
を一見を_レる_レ蓋し往昔千三百年代より千五百年代に

至_レる_レまで漢文のみ世_レ不_レ行_レる_レれ_レる_レ文章上_レ研究想像の行
か_レる_レ、と_レあ_レく唯_レと_レ渾沌と_レて_レ智情の未_レた_レ分_レる_レれ_レる_レ
姿_レなり_レき_レ是_レ蓋し幼稚なる精神を以て至難なる外國
の文章言語を記憶せんと勉め絶えて其他を顧み_レる_レ能
は_レざる_レ、_レを_レ為_レり_レる_レん千六百年代_レ不_レ至_レりて日記体及
び和文の三者出来_レる_レ稍_レて人心の一斑を窺ひ得_レる_レき_レ不_レ
至_レま_レる_レ今當時_レ不_レ顯_レれ_レる_レは想像を竹取うつ_レは等_レし就_レま
て考ふ_レ、不_レ其感情全く當今の人情_レ不_レ相違_レる_レ恰も異境
不_レ入り異人_レ不_レ逢_レふの思あ_レる_レ如何なる_レ斯_レの想像の心
裡に發_レる_レやと疑_レる_レ、程あり蓋し當時の人未_レだ多
く事物_レ不_レ接_レる_レを_レ其想像精密なら_レば_レ、_レを_レ為_レり_レ不_レ自

ら世小あま得ぬ想像の胸裏に發すはふらふら故に其
文も亦た素樸にして更小味ひる然る小千七百年代
の末より文弱の氣風都の内に發生し滿堂婦女子の如
くなき小なきを其文章稍く猥褻痛風の加ふは免る
社を雖とも亦自から艶美の情味と添ふるに至れり
而て千九百年代小至りて關東武夫の氣性漸く世小顯
る社を仍る活潑勇壯の氣又文學の中小加りたり是
を即ち感衰記、平家物語の氣と優と茂兼ぬ之を讀み
て樂まらるる所以なり是れを天下治平と致を事殆んと
百五十年人智始りて社會の大勢と見ると知る故小時
勢論漸く文學の中小參入して文章自ら靜肅完備は体

と致さるる是則ち保曆間記、神皇正統記の自ら精神を存
し而ちて嚴格の体あり所以なき其後小至りて武人擅
横の世の中と成り下りて殺伐鬪争の災世雲を蔽ひし
るや文章紛雜の姿となりて終小全く情味を失ふる至
れり然まとも之あり猶可なり二千二百年代の末より
全く之を失ふ小至れり豈は哀しむるや嗚呼我國文
學を史上小見ると近しと為るべし然る小王政の時
之と保護し失し強ひて日本の精神を驅りて外國は文
章と古語と小注ぎ之をして十分は發達すかと得せし
めを鎌倉政府の世となりて日本の文學ハ最も便利な
る文體を求めて發育し終小我國文學の基を立てし

と雖ども又久しかりを志て封建亂離の世とふり文學も亦世事紛紜の中小滅をば小至れ應仁の亂より以後徳川氏の天下を制する小至りて殆んと百五十年間文學更不再興の勢ひあり唯た武人鬪争の慘状を見よの史に小見よ也

全物の理を究り其功用と知らんとすふを固より智力の働きふりて研究の部類に属すべきそのふさども其理と究り其功用と知りての後さてこそと感ずるの感情に至りてを即ち想像の部類に属すべきそのふさの例へん小諸業無常是生滅法と云へり語の如きハ萬有の理と説明したるものなりふべしと云ふも其

理を心小悟りて人生の墓なきを觀む小至りてハ即ち是れ想像なりとこれを研究と想像とを其性質大小異なりとも其相移りや恰そ此隣の如き處ありふり研究の淺き時ハ當りては想像も自ら淺く研究の進む小至りては相像も進みて高尚なるまじり彼の赤壁の賦に西望夏口東望武昌山川相繆鬱乎蒼々此非孟德之困於周郎者乎と云ふを如きく往時を追懐するの智あり小たりは遠き感をもこれ想像なり又客亦知夫水與月乎逝者如斯而未嘗往也盈虛者如彼而卒莫消長也云々の如きハ理を解する小あらざれば感ぜざるは想像なり徒然然とあだり野の露きゆる

時なく鳥部山の烟立去らで住みこつたならいふら
 ば如何小物のありれもふらんと云ひ又花のさか
 る小月々々まぬす流のさ見を物うと雨をむひく
 月をこひを秋のりて春のゆくへ志らぬえかなあは
 秋来て情あかしくと云ふが如きも亦た十分ある研究
 照くして能く言ふ處さ處小あらす故に最も巧み
 想像を迷へん心欲をも最も研究を博くせざるべ
 からば是れ想像と研究と文學上小於く相待つ所以
 なるべし其時々の研究の如きは其時々の研究の如
 日本開化小史四の巻終の巻終の巻終の巻終の巻終

明治十一年二月廿六日板權免許
 同十六年三月六日再板御届
 同十六年三月出版

著述無出版人

東京府士族

田口卯吉

東京牛込區牛込北
 山伏町四十三番地



東京 書林 賣捌

- | | |
|---------|-------|
| 日本橋通二丁目 | 北島茂兵衛 |
| 同通二丁目 | 稲田佐兵衛 |
| 芝三島町 | 山中市兵衛 |
| 淺草茅町三丁目 | 北澤伊八 |
| 小石川大門町 | 青山清吉 |
| 日本橋通三丁目 | 丸屋善七 |
| 同通二丁目 | 小林新兵衛 |

